

# より良い医療を 受けるために

「がん市民セミナーから」

(下)

徳島市内の徳島大学長井記念ホールで開かれた第6回徳島がん市民セミナー(NPO法人ホスピス徳島がん基金など主催)。後半はシンポジウムがあり、県内のがん患者、がん診療連携拠点病院の医療者、行政関係者らが、それぞれの体験を基に、県内の現状や課題について意見を交わした。

「徳島大学病院、県立中央病院、徳島赤十字病院、徳島市民病院といった県内のがん診療連携拠点病院が上手に連携をすれば、患者は県外に治療に行かなくても、全国のがん専門病院に負けない治療が受けられるのではないか」

県内のがん患者らでつくる「ガンフレンド」の勢井啓介代表は、自身の体験を踏まえてそう語った。

勢井さんは、7年半ほど前になんと診断され、地元のがんセンターで手術したが再発。東京の国立がんセンターで再手術した。

高いがん医療が受けられる環境の整備が、目的の一つだ。永井院長はそうした現状を説明した上で「格差を解消するため、がんの標準的な治療計画を制定し、どの病院のどの医師が治療しても、同じ方針、同じ治療成績が出せる体制作りが必須だ」と話し、さらに標準化できない部分は「患者一人一人の事情に合わせたオーダーメイド治療が法」は、全国どこでも質の可能になるようなシステム

患者の15%が、より高度な医療を求めて、勢井さんのように県外の専門病院などで治療を受けていると指摘した。また、徳島と都市では格差はある。2007年に施行された「がん対策基本法」は、全国どこでも質の

## シンポジウム



県内のがん医療の現状を語るがん患者や医療関係者—徳島大学長井記念ホール

## 患者同士支え合う体制も

を構築したい」と述べた。治療支援ネットワークの整備などを目指し、今年8月診療連携センターの宇都宮に開設した「徳島がん対策センター」は、患者の間「がん市民セミナー」について説明。各病院のがん医療に関する情報の一元化を目指して作られたホームページを紹介し「がん患者らの意見を取り入れ、患者が本当に必要とされている情報を掲載していきたい」と話した。

このほか、県内のがん患者会を代表し、乳がん患者らでつくる「ひまわり」の坪田明子代表や、「あけぼの徳島」の細尾正代副代表が、自身の体験や会の活動内容について述べ、患者同士や医療機関のネットワークの必要性を訴えた。

最後に、全国のすい臓がん患者らでつくる「NPO法人パンキャンジャパン」(東京都)理事の眞島喜幸さんがシンポジウムを総括して「がん診療連携拠点病院という名称や、相談センターの存在すら知らない患者は多い。せつかくネットワークができて、市民に浸透しなくては意味がない。人材が足りないなら患者に協力してもらって、患者同士で支えあう、ピアサポートのような体制をつくってほしいのでは」とアドバイスした。

## 拠点病院連携し治療を